

指導要領改定に尽力 蘇南高の小川校長

本年度からの学習指導要領改定に関わるなど世界史教育の第一線で活躍する人が県内にいる。蘇南高

校(南木曾町)の小川幸司校長(五五)。「世界史は単なる暗記科目ではない。歴史を通じて人間の姿を学んでほしい、これからどう生きるかを考えてほしい」と話す。

(戸田稔理)

高校教諭になった理由は、
は。少し重たい話ですが、大学の頃に高校の同級生二人が自死しました。皆が能天気なバブル経済下で、彼らは生きる意味がないかと思っていました。もう一度高校に戻ってやり直せたら。大学院に進み、研究者になるか迷いましたが、教諭として高校生の未来を支えることが自死した二人への思いが和らぐことにつながると思いました。

― 県立高校では長く世界史を教えていました。
意識したのは、本質をそのまま分かりやすく楽しく伝えること。難しいことを、うまくして簡単に変えてはいけません。例えば「新型コロナウイルスは重症化しないからインフルエンザと同じ」と言う人がいます。そう捉えれば制限

がなくなり生活しやすくなる。けれど高齢者や基礎疾患がある人は重症化しやすい現実もある。一方からしか見えないのは本質を、ごまかすことです。世界史は立場によって捉え方が異なります。生徒にはその複雑さをありのまま伝えることで、多面的に物事を見て考える力を付けてほしいのです。

― 教育への熱意は、どこからきたのでしょうか。
三十代の頃、学習意欲の低い高校に赴任しました。「この子たちにはこれくらいいいだろう」と考え、教科書を分かりやすく伝えるだけの授業をしていました。ですが、ある日、映画「硫黄島からの手紙」を見て感じたことを生徒たちに熱く語ったことがあります。米国人の監督が戦争時の日本人を敵ではなく、人間として優しく描いたことに

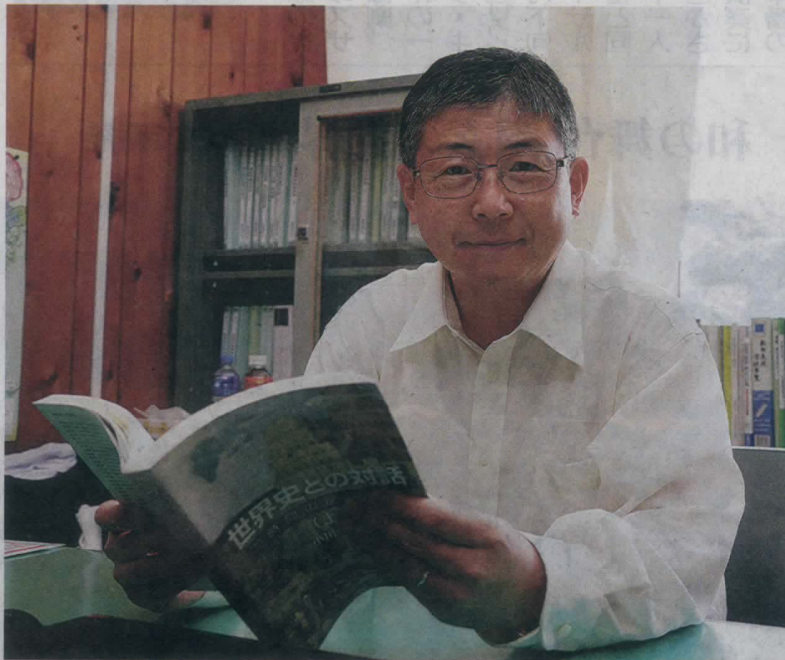
感動したのです。後日、金髪で派手な服装をした生徒が「私も感動した」と伝えてくれた。わざわざ遠くの街まで映画を見に行ってくれたんですね。どんな子にも熱意を持って話せば伝わるとだと思えました。教員が生徒の限界を決めてはいけないと反省しました。

― 本年度からの学習指導要領には、小川さんの意見も反

映されています。戦後と現在の教科書を比較したところ、高校生が覚えるべき用語が千五百個から三千五百個に増えていました。こんなに暗記させてどうするんだ、と疑問に感じました。文部科学省のワーキンググループの一員として社会・地歴公民の要領づくりに関わり、生徒がどのように学び、どう生かすのかを重視する教

育に転換すべきだと指摘しました。

本年度からは日本史と世界史を融合して近現代史を学ぶ「歴史総合」という必修科目が始まりました。そこで重視するのは「問い」を考えること。例えばフランス革命と明治維新が起きた原因を比較し、議論してみる。生徒が教科書の内容だけでなく、自らの歴史像をつくる授業になればと思います。



― 南木曾町の蘇南高で
「世界史との対話」全3巻(地歴社)、「歴史総合を学ぶ① 世界史の考え方」(共著、岩波新書)など。

― 世界史との対話」全3巻(地歴社)、「歴史総合を学ぶ① 世界史の考え方」(共著、岩波新書)など。

育に転換すべきだと指摘しました。

本年度からは日本史と世界史を融合して近現代史を学ぶ「歴史総合」という必修科目が始まりました。そこで重視するのは「問い」を考えること。例えばフランス革命と明治維新が起きた原因を比較し、議論してみる。生徒が教科書の内容だけでなく、自らの歴史像をつくる授業になればと思います。

― 二〇二〇年度に蘇南高校に異動しました。

蘇南にはさまざまな生徒がいます。「部活を頑張りたい」「大学に進学したい」「中学校で不登校だった」。誰もが大学受験に向けて必死に勉強するわけではありません。複数の物差しを持つ生徒を支えるのは、私にとつての挑戦で理想的な教育環境です。

私の人生のスタンスは世界の

のことをたくさん知ること。

どの仕事を選んだとしてもそれは変わりません。学校の進路指導でも「どんな仕事をしたいか」を生徒に質問する前に「どんな人間になりたいか」「どのように人々に貢献したいか」を尋ねます。生徒たちには卒業後も自分のスタンスを持って生きてほしいと願います。